

Changes in the Classroom Management Skills of New Teachers Based on Student Guidance : The Effects of Continuous Practice through Short Exercises and Mentoring

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2019-11-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 堂前, 拓耶 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00026897

若手教員の生徒指導の視点を踏まえた学級経営観の変容

—ショートエクササイズとメンタリングの継続的実践の効果—

堂前 拓耶

Changes in the Classroom Management Skills of New Teachers Based on Student Guidance
: The Effects of Continuous Practice through Short Exercises and Mentoring

Takuya DOMAE

1 問題の背景と本研究の目的

文部科学省（2017）によると、学校を組織する教職員の年齢構成の変化は著しく、教員経験10年未満の教員のいわゆる「若手」と教員経験10年以上20年未満のいわゆる「ミドルリーダー」が占める割合は、直近の10年間で逆転していることがわかる（図1）。このような教職員の年齢バランスの崩れや、教員の多忙化による時間確保の困難などにより、若手教員が先輩教員から指導・助言を受けるという機会が減ることで、様々な問題が起きている。また、中堅教員一人あたりが関わる若手教員の数が増加してきて

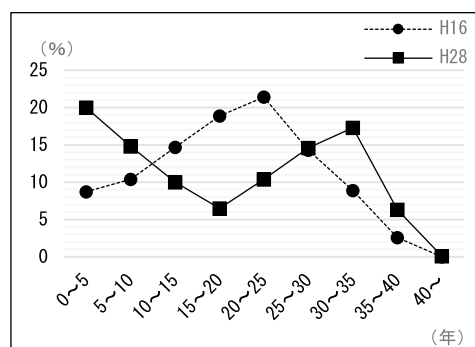


図1 教職員の年齢構成の変化

いることから、若手教員一人一人に指導する時間を十分に確保することができず、それによって若手教員の課題が増加してきているということも推測できる。中央教育審議会（2015）においても、このような事態に対して、「継続的な研修を充実させていくための環境整備を図るなど、早急な対策が必要である」と記されている。

これを踏まえ、本研究では、学級担任、特に教員経験年数の浅い若手教員の学級経営力量の向上を図ることとする。松岡（2017）では、学級経営力は『子ども理解・個別支援』『集団づくり』『授業づくり』そして『他の教員との連携』に関わる力量など様々な要素が統合された力」と定義されている。その中で、「子ども理解・個別支援」と「集団づくり」に注目し、教師の「子ども間及び教師－子ども間の良好な関係をつくり出す能力」が生徒指導に視点を置いた学級経営力量であると考えた。そこで、アクションリサーチでの関わりを通して、生徒指導的な視点を踏まえた学級経営に関する考え方やスキルの獲得の支援を行うことで、若手教員の学級経営観の変化を促すことを目的とする。

2 アクションリサーチの方法

A市立B中学校の2018年度の2年部（教員9名、生徒192名）を対象とし、期間は2018年4月～2018年12月とした。なお、メンタリングについては、C教諭（採用1年目）、D教諭（採用2年目）に対して実施する。

(1) ショートエクササイズの継続的実践

構成的グループエンカウンターの人間関係作りの視点を取り入れ、実施時間を5～15分としたショートエクササイズを2学期の9月から開始する。1週間に1回または2週間に1回のペースで行い、月ごとに2～3回のエクササイズを行う。また、体育大会や合唱コンクール、職場体験

といった行事も行われるので、その準備や振り返り等、時期に応じたエクササイズを用意していく。

(2) メンタリング

若手教員2名との話し合いの中で、学級経営に関する困り感や悩みの共有、アドバイスの投げかけなどを行い、学級経営に関する成長や意識の変化を促すことを目的とする。1学期は特に時期を定めずに行い、2学期からは水曜日をD教諭、金曜日をC教諭と実施日を定め、それぞれの教諭の授業や短学活、生徒との関わりなどを観察し、それに対する助言を行ったり困っていることの相談にのったりするためにメンタリングを行っていく。

(3) 効果の検証

アクションリサーチの事前、事後の変化を測るために、生徒には学級環境適応感尺度「アセス」を、若手教員には「PAC分析」を実施する。

① 学校環境適応感尺度「アセス」

栗原・井上（2010）による学校環境適応感尺度「アセス」を用いて、生徒の学校適応感の変容を調査する。実施時期については、第1回目を6月、第2回目を12月とする。

② PAC分析

内藤（1997）によるPAC分析を用いて、若手教員の学級経営観の変容を調査する。実施時期については、第1回目を7月、第2回目を12月とする。

これらの分析は2回目終了後、それぞれを比較し分析する。

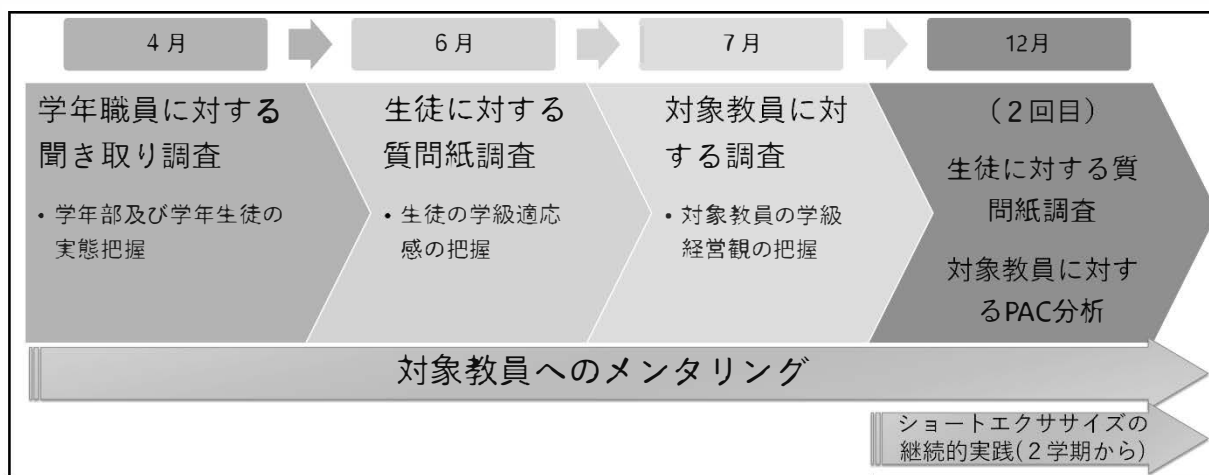


図2 アクションリサーチの全体計画

3 ショートエクササイズの継続的实践

國分（2004）による構成的グループエンカウンター理論に基づいた取組を行っていく。教育現場は多忙であるため、グループアプローチを行っていく時間を確保することが難しい。また、高柴（2016）では、「短時間のプログラムを繰り返し実施した方が、年数回の特別授業形式で行うよりも、『予防的・開発的教育相談』の効果は高いと推測できよう」とあることから、1エクササイズあたりの所要時間を短縮したショートエクササイズを導入することにした。ショートエクササイズとは次のようなものである。

- ① 1回あたりの時間は、5～15分とし、週1回もしくは2週に1回で継続的に行う。
- ② 構成的グループエンカウターの構成をなるべく守るようにする。
- ③ 時間が許す限り「シェアリング」を行う。
- ④ 「自己開示」と「介入」を積極的に行う。

本研究では、④の「自己開示」と「介入」を意識して取り組むように心がけた。「自己開示」とは、教員自らが、自身のことを語りながらエクササイズを進めていくことである。教員自らが自己を開くことで、生徒とのふれあいを促進させることができ、生徒との人間関係づくりを促すことができる考えた。「介入」とは、エクササイズが「促進するよう軌道修正したり自分の本音と向き合えるように『応急措置』したりすること」（國分，2004）である。教師は、活動中の生徒間の関わりを観察することや生徒との関わりを通して、生徒理解をより深めることができるようになると考えられる。

これら2点を意識しながら行うことで、教師の生徒指導的視点を踏まえた学級経営観に変化が起ることが期待される。

4 メンタリングの継続的实践

本研究では、主に、朝の会・帰りの会などの SHR、授業中、休み時間、昼休みのメンタリング対象の教師の行動を観察した。観察対象とした教師の行動は、生徒への発言の様子や生徒との関わり方など、教師と生徒の関わりが表れる場面における言動のことである。観察したあとは、その日のうちに対象教員とメンタリングを行った。メンタリングは、次の2パターンで行った。1つ目のパターンは、時間を決め、話合いの場所を設けて1対1で行う面接方式である。対象教員の空き時間や放課後などを利用し、応接室や会議室などの落ち着いた雰囲気の中で行った。2つ目のパターンは、わずかに空いた時間などを利用して、廊下等で立ち話のように行う立ち話方式である。1つ目の面接方式のように、場所や時間を選ばずに、対象教員が空いた時間を見つけ次第行えることが利点である。今回のメンタリングでは、対象教員が多忙でなかなか時間がとれなかったため、後者の立ち話方式のメンタリングを行うことが多かった。メンタリングの内容は、日々の学校生活で抱えている悩み等を共有することと、生徒間、教師-生徒間の人間関係づくりに関する具体的な方法等のアドバイスを行っていくこととした。その上で、C教諭には困り感を抱えている生徒や、苦戦している生徒に対する関わり方、C教諭自身が苦手とする生徒との関わり方などに関するアドバイスを、D教諭には生徒の居場所や活躍の場を与える方法についても、アドバイスしていくこととした。

5 生徒の学校適応感の変容

栗原・井上（2010）による、学校環境適応感尺度「アセス」（ASSESS：Adaption Scale for School Environments on Six Spheres）は、適応感を測ることができる尺度である。「アセス」は、大きく「生活満足感」「対人的適応（教師サポート、友人サポート、向社会的スキル、被侵害的關係）」「学習的適応」の3

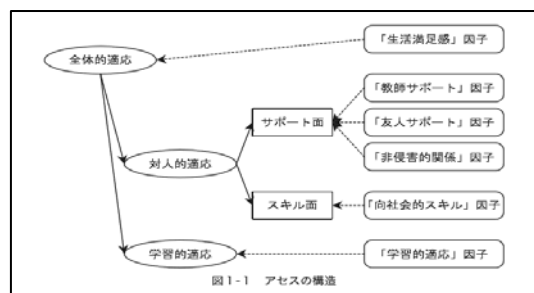


図3 アセスの構造

つの観点と6つの因子で学校適応感をとらえている。生徒が34項目のアンケートに答え、その結果をパソコンで入力することで「個人特性表」「学級平均表」「学級内分布表」の3種類のシートが出力される。

表1は全学年の1回目のアセスと2回目の結果を比較し、その変化をまとめたものである。これを見ると、ほぼすべての因子が、上昇するか現状維持にとどまっていることがわかる。特に、向社会的スキルに関しては、4クラスで得点が増え、生徒同士が他者との良い人間関係をつくるためのスキルを獲得していることを示している。このような表れがある学級が多いということは、学級としても学年としても、人間関係づくりに改善の傾向が表れてきていると考えられる。

また、吉川・高橋（2012）では、友人関係が、自尊感情や学校満足感に影響を与えることが示唆されており、加藤・太田・松下・三井（2018）では、中学1年生から中学2年生の2学期まで、自尊感情が低下し続けると述べている。そうした中で、生活満足感因子では、6学級のうち4学級が向上・現状維持、友人サポート因子では、5学級が増え・現状維持とすることができた。

表1 アセスの因子別変化（学級）

	上昇	現状維持	低下
生活満足感	2	2	2
教師サポート	3	1	2
友人サポート	2	3	1
向社会的スキル	4	0	2
被侵害的關係	2	2	2
学習的適応	1	2	3

6 若手教員の学級経営観の変容

若手教員の学級経営観を調査するために、内藤（1997）によるPAC分析を用いることとした。PACとは、個人別態度構造（Personal Attitude Construct）であり、個人別に態度構造を測定するために開発されたものである。この分析の最大の特徴は、「個」へのアプローチである。「個人の自由連想によって個人別に分析する場合には、被験者自身のスキーマという枠組み（フィルター）を通して抽出される変数（連想項目）を採用」することで、「被験者一人ひとりのための独自の実験調査項目分を作成する方法」とある。また、「変数が被験者自身のスキーマを構成する要素によって決定され、その構造が分析されるときに、本質的な意味での、被験者独自のスキーマの構造が解明されることになる」と述べており、「個」を把握するための技法として位置づけられているといえる。PAC分析を実施する手順は、表2に示す。

表2 PAC分析の手順

	内容
①	分析したいテーマに関する自由連想
②	連想項目間の類似度評定
③	類似度距離行列によるクラスター分析、デンドログラムの作成
④	被験者によるクラスター構造の解釈やイメージの聴き取り
⑤	検査者による総合的解釈

2人の若手教員の指導観や学級経営観に関する2回のPAC分析の結果（図4、5）から、2人に共通する変化が起きていることを読み取ることができる。1つ目は、学級経営観が具体化されたということである。1回目の分析ではクラスターがはっきりと表れなかったり、連想項目も抽象的なものが多かったりしたが、2回目では、それぞれのクラスターがはっきりと表れ、連想項目も具体化された。さらに、各クラスター間のつながりについても、より明確になった。2つ目

は、生徒理解が進んでいるということである。

連想項目では、生徒理解のための項目が増え、より具体的な手立てが表れてきている。また、学級全体だけでなく、課題や困り感を抱えている特定の生徒に対する視点をもつなど、生徒理解のための多角的な視点が備わってきたと考えられる。

学級担任のリーダーシップの研究で用いられる理論として、PM理論がある。PM理論とは、集団の機能を示す理論であり、PはPerformance（集団の目標達成機能）、MはMaintenance（集団維持機能）を意味しており、その指導類型をPm型、pM型、PM型、pm型（大文字：強い、小文字：弱い）の4つに分類するものである。Pは、集団の目的達成や課題解決に関する機能であり、学級内で言い換えれば、規範意識や集団の意識づくり、しつけなどがそれにあたると考えられる。Mは、集団の維持に関する機能であり、学級内で言い換えれば、集団の人間関係を作る力や、教師の生徒に対する配慮などがそれに当たると考えられる。

藤原・大木（2008）では、学級適応を表す学級モラルの形成には、M機能が強く影響しており、教師の指導類型がPM型やpM型のようにM機能が強い方が望ましい学級になることを示唆している。今回の分析では、生徒理解に関する理解が深まっていることから、C教諭、D教諭ともにM機能の成長が図られ、より充実したものと考えられる。また、それに伴い、P機能がやや弱まったり調整されたりした様子も見られることから、学級担任として望ましい指導類型である、PM型やpM型に近づいていると考えられる。

7 総合的考察

(1) 生徒の学校適応感の変容に関する総合的考察

アセスの結果から、特に、向社会的スキル因子と教師サポート因子の2因子については、上昇した学級が多いことがわかった。ショートエクササイズを行う上でのねらいとして、「生徒同士の人間関係づくりをねらいとする活動体験を通して、各生徒の自己理解や他者理解を進めること」や「学級担任との協力に基づいた共同実践を行うことで、学級担任自身の生徒理解の深化や生徒と学級担任との心理的距離を近づけ、学級担任自身が生徒間および教師-生徒間の関係づくりに基づいた学級経営力量を増進させること」というものを挙げている。ショートエクササイズの実

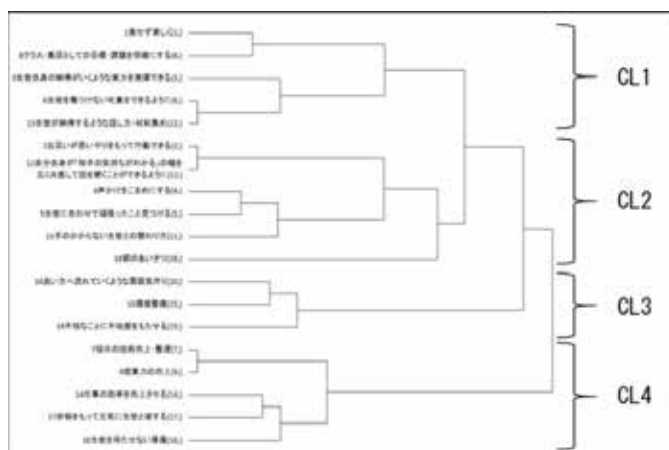


図4 C教諭 PAC 分析 2 回目のデンドログラム

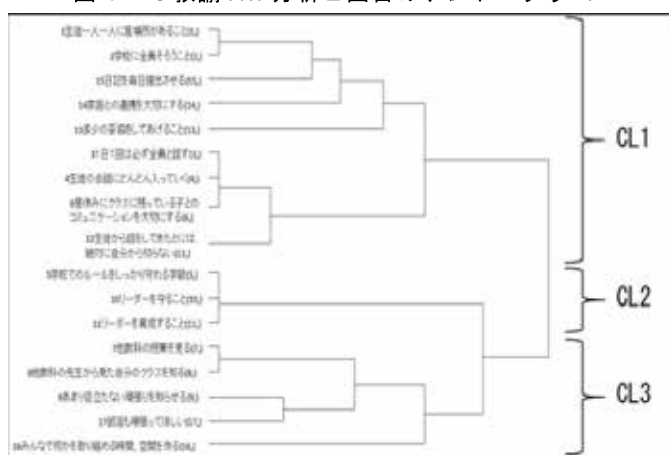


図5 D教諭 PAC 分析 2 回目のデンドログラム

践を通して、1対1での活動やグループ活動など、様々な形態で他者と関わる実践を行った結果、生徒が他者と関わる上でのスキルを身につけていったことで、向社会的スキル因子の値を向上させたと考えられる。また、学級担任は生徒と関わるが増え、教師-生徒間の距離が近づいて、より良い人間関係が築くことにつながったと考えられる。さらに、教師-生徒間の人間関係づくりが進んだことにより、通常生活の中でも、生徒と教師が関わる機会が増えたことが、生徒の教師サポート因子の値を向上させた1つの要因と考えることができる。

これらのことから、ショートエクササイズの実践が生徒の学級適応感の変容をもたらすことに対して、効果的だったと考えることができる。

(2) 教師の学級経営観の変容に関わる考察

ショートエクササイズでは、主に生徒の自己理解や他者理解を行い、人間関係作りを促すというねらいの活動を多く行った。その結果、2回目のPAC分析の結果では、1回目の分析では見られなかった、生徒理解に関する項目を読み取ることができた。また、面談の中でも、生徒と関わる機会が増えたことを自覚している発言や、生徒の新たな一面に気づかされたと思われる発言も見られた。

メンタリングでは、主に生徒理解に関する内容を扱っていたこともあり、2回目のPAC分析の結果にも、生徒理解に関する項目が増えていることがわかった。具体的には、目立たない生徒や生徒指導的に困難さをもつ生徒を、学級内でどのように生かすかという視点で行ったメンタリングが、PAC分析の中では、「生徒に合わせて頑張ったことを見つける」や「手のかからない生徒との関わり方」といった形で表れてきている。また、関係作りが進むと、若手教員が自ら悩みを打ち明けたり、困っていることに対する助言を求めたりするといった、カウンセリング的な効果があることもわかった。メンタリングは、考えを共有したりアドバイスしたりすることを通して、学級経営観に影響を及ぼす可能性があると考えられる。また、カウンセリング的に行うことで、悩みを解消したり前向きな考えをもたせたりすることもできることがわかった。

(3) まとめと課題

今回の実践では、実習校であるB中学校の協力のもと、ショートエクササイズとメンタリングの継続的な実践が、若手教員の学級経営観の変容に及ぼす効果について検証し、生徒理解に関する意識を高める効果が期待できることが示唆された。しかし、それと同時に、ショートエクササイズ、メンタリングともに、時間の確保が困難であることや学級全体と個のバランスをとりながら支援することの難しさといった課題も浮き彫りになった。それらの改善を視野に入れつつ、今後は、若手教員の成長を促すメンタリングの効果的な実践方法や生徒の学校適応感を向上させるショートエクササイズの開発などを積極的に行っていきたいと考えている。

〈引用・参考文献〉

- 文部科学省 (2017). 平成 28 年度学校教員統計調査 (確定値)
- 國分康孝 (2004). 構成的グループエンカウンター事典
- 栗原慎二・井上弥 (2010). アセスの使い方・活かし方
- 内藤哲雄 (1997). PAC 分析入門: 「個」を科学する新技法への招待